

SHINGO SCOPE



シンゴスコープ

12月号 (2008年12月1日発行) 静岡市葵区横内町32番地 TEL.054-245-7474 FAX.054-246-7463 天野進吾

天野進吾が視る。語る。今日のできごと。まつりごと。

ホームページを見てください <http://www.amano-shingo.info>

ダッチ・ロールする静岡空港

静岡空港の開港に待ったをかけた「立ち木」問題は、何時しか全国的な話題となって流布しております。

先週、大学時代の同級会が岐阜で開催され、出席した仲間が私の顔を見るや、空港の「立ち木」問題を話題として集まってくるのでした。

もとより前代未聞のこの醜聞は、来年3月開港を心待ちにする県民にとっては、将に頭から水を浴びた思いであり、更はその原因を詳細に知らされた時、怒りは「心頭」に達したところであります。

勿論、県議会に席を置く私達にも、凡そ2年もの間、たとえ県当局が「測量の検証」で発見した重大な瑕疵を機密事項としてこれを隠蔽してきたにせよ、関知できなかった責任を自覚し、その不明をお詫び申し上げる次第であります。漸く10月末の全員協議会でその全貌が明らかになれば、初めて事の重大さを知った議員も決して少なくはありませんでした。

事の起こりは、2年前、土地収用法を執行するに当って、重要な瑕疵を見つけた現場職員

は、上司への報告を怠り、その後も「なんとかなる」の甘い憶測のもと、地権者への対応も「役人根性」そのままに対処しようとした結果、遂に開港間際になって、課題の「立ち木」問題が県民の前に露呈したのであります。

県は急遽、完成している2500mの滑走路を、「立ち木」が航空法に抵触しないよう、暫定的に2200m仕様の飛行場として、来年7月までには開港できるよう、11月6日、臨時県議会に提案されたのであります。

この提案に対し県議会の一部会派からは石川知事の失政を非難、暫定対応の1億1000万円の予算計上についても反対されましたが、私達は「知事の責任」問題と開港のための「窮余の一策」とは別問題と考え、この議案に賛成致したのであります。

それでは何故にこのような前代未聞の失態を犯してしまったのでしょうか？

県側の説明によれば、発端は測量会社と担当する空港部の判断ミス、即ち測量段階でのデータを再確認せずに利用した結果、強制収用すべき用地が計画の策定時から漏れてしまったの

であります。

非難されるべきは、昨年9月、この重大な瑕疵が報告されて以来、遂に当該地権者を説得できなかった知事をはじめとする執行部の問題解決への姿勢ではないでしょうか。

嘗て、市長当時、私には様々な難航する「用地問題」がありました。たとえば南沼上の焼却用地、内牧の「桜の園」、ツインメッセの建設用地、そして幹線道路用地など枚挙に遑ないところでした。その代表はご存知の「バイパス用地」でありました。一切の面談もガンとして固辞するバイパス地権者の代表者と面会する手段として、元旦の早朝、「年賀タオル」を片手に訪問、ついに応接間に通されたことを今でも覚えております。

以って私のパフォーマンズと称する方もおりますが、「窮鳥懐に入れば獵師これを撃たず」と格言にもあります。

石川知事、もとより一筋縄にゆかない地権者でしょうが、ここは乾坤一擲、県政の未来のために「自尊心」をかなぐり捨てて、対峙してくれることを期待します。

今川屋敷は何処にあったのか？

16世紀、東海の雄と謳われた今川氏親、義元親子がこの駿府を舞台として戦国大名の頂点を極め、「京都」に倣った華やかな文化を構築しておりました。

さて、郷土史の大きな疑問の一つとして、当時の今川氏の館が、どの辺りにあったのか、未だ謎のままです。

通説では先ず、長谷通りと静岡の間にあったという草深説、二つ目として「屋形町」という町名そのものから判断して、「親方様」即ち今川公を指し、ここに今川館があったとする二つの説があります。

しかし一方では「屋形町」説には次のような伝説がありました。

応仁の乱（1465～75）の渦中に巻き込まれた京都の公家たちは、荒廃した京都を見限り、今川氏を頼って駿府に落ち延びて来ましたが、その際、今川が公家達に住むべき「館」を提供した処から後に「屋形町」の呼称で呼ばれたとも言われています。

20数年前、県立美術館の建設が企画され、その候補地として駿府公園内に決定したことをご記憶のことと存じます。

当然のこと、埋蔵文化財の調査が進む中で、なんと今川家の家臣の住居跡が発掘されたのでありますが、結局、調査後、埋め戻してしまいました。

静岡市にとって今川の文化は一面で

一寸一言 私の雑記帳から

実り豊かな人生

— 望月哲夫の言葉集から —

「天神屋」と云えば静岡市民の馴染みの屋号でした。勿論、今でも「屋号」だけは健在ですが、その「天神屋」の創設者・望月哲夫氏は今、伝馬町の自宅で悠々の人生を営んでいるのであります。

私個人としても、最初の市長選挙に際し中枢的役割を担っていたとき、その後も何くれとなく久しいお付き合いを戴いてまいりました。

最近の氏の日課は伝馬町通りの花壇の手入れ、殆どひとりの手によって美しい街頭を飾っております。折に経費については頭の痛いところとこぼしております。

は徳川以上の影響を与えていると私は考えます。

しかし、何故か「今川」は不人気なのであります。

す。



ますが既に長期に亘る奉仕であります。そしてもう一つの趣味が「言葉の花束」5・7・5調だったたり三十一文字で、自身の折々の思いを綴っております。

『クラーの故障がなおりや秋の風』
『寝るは二時起きるは六時寝不足だ昼寝で補う介護の暮らし』
『連れ添って妻の料理の50年飼慣らされて再現できず』
『世話になりお返しできぬと嘆く妻貸しを回収すると思えば』

「一日一話」欠かすことなく政治・文化・生活などを材料に「てっちゃん」の独特の見方・発想で書き続けております。

「老驥千里を思う」の譬えがあります。新しき年をとえ「牛歩」であっても夫婦仲良くお過ごし下さることを祈念いたします。

クリスマスとエコロジー

12月の声を聞くと、街角のイルミネーションがクリスマスの雰囲気盛り上げます。真っ暗な冬の夜を背景にキラキラと輝くイルミネーションは、人々を夢の世界へと誘います。

しかし電気代、CO2排出量といった環境面から考えると、イルミネーションは無駄なものでは？という意見も出ています。もちろん、白熱灯からLEDへと省エネ仕様の電球が主流になっていますが、それでもオフィスや家庭でこまめに電気を節約している現状から考えると、確かにイルミネーションは無駄なものかも。

けれども厳しい社会状況が続く時代だからこそ、人々の心をうるおすために、イルミネーションという少しの贅沢があってもいいのではないのでしょうか。イルミネーションの光に映る人々の表情は、誰も優しく、微笑んでいるように感じます。

また、たまにはクリスマスの原点に立ち返り、イエスキリストが生まれた遠い昔、電気のない時代を振り返り、暖炉の火やキャンドルの光でクリスマスを過ごしてみるのもいいかもしれません。

彩時記

『天野進吾』の歴史講座

町内会の集会、サークル活動などに天野進吾を呼んでみませんか。大変ありがたいことにこのSHINGO SCOPÉの郷土史が好評を頂いております。どうぞ、お気軽にお声掛けください。